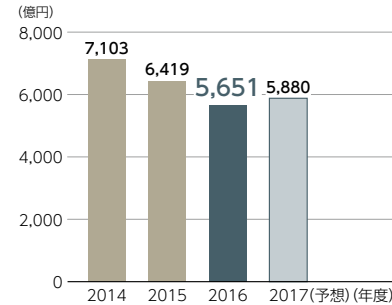


製錬事業

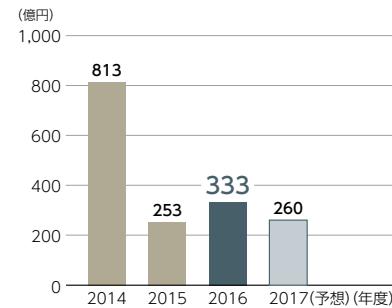
Smelting & Refining Business

〔売上高〕



銅の生産量および販売量は前年度を上回りましたが、ニッケルならびに金の生産量および販売量は前年度を下回りました。CBNCおよびタガニートHPALは、前会計年度で12月末から3月末決算へ変更し15カ月であったことから、生産量および販売量は減少しました。

〔セグメント利益〕



ニッケル販売量の減少に加え、ニッケル価格の下落などによる影響はありましたが、CBNCおよびタガニートHPALにおけるコスト削減などにより前年度を上回りました。

資源部門や海外鉱山会社などから調達した原料を銅・ニッケル・金などの金属に製錬して販売しています。当社は、従来技術的に難しいとされていた低品位ニッケル酸化鉱からのニッケル回収の商業化を世界に先駆けて成功するなど世界トップクラスの製錬技術を有しています。その技術力に磨きをかけ3事業連携による販売力の強化などにも取り組んでいきます。

事業環境および15中計の重点施策

2016年度における事業環境は、米国をはじめとする保護主義・排外主義の台頭など、懸念される変化が見られたものの、非鉄金属の価格は総じて堅調に推移しました。トピックス的な動きとしては、2017年1月、ニッケルなどの未加工鉱石の輸出を規制していたインドネシアにおいてその規制が緩和されたことがあげられます。今後、非鉄金属の価格は、中長期的には需給改善に伴って上昇すると見込まれます。また、エコカー向け・二次電池の市場拡大に伴い、当社が手がける高純度ニッケル材料の需要は今後さらに高まると期待されています。

なお、製錬事業では、15中計の重点施策として、タガニートHPALの拡張、HPAL周辺技術での成長戦略の展開、銅製錬事業の競争力強化を推進しています。

2016年度の取り組み

銅の生産量および販売量は前期を上回りました。ニッケルについては、コーラルベイニッケルとタガニートHPALにおける中間原料の減産により下回りました。また、コーラルベイニッケル社およびタガニートHPAL社は、連結決算の対象期間を親会社に合わせるため前期は15カ月での決算となっており、その結果、生産量および販売量は前期比で下回っています。

主な取り組みとしては、東予工場において銅製錬で過去最高となる年間45万トンの生産量を達成しました。また、競争力強化の一環として、金属スクラップなど二次原料からの銅やニッケルの回収にも着手しています。播磨事業所

では事業転換を進め、硫酸ニッケル4万5千トン体制を構築しました。HPALの競争力強化をめざし、新たにスカンジウム生産体制の構築にも着手しています。これらの取り組みの結果、製錬セグメントの売上高は5,651億円(2015年度比12%減)、利益は333億円(同32%増)となりました。

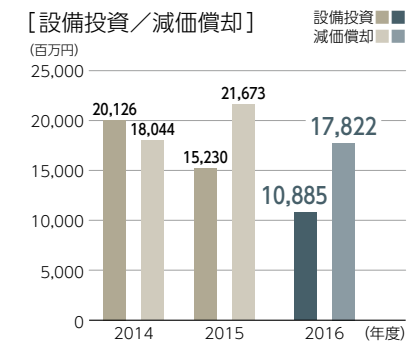
2017年度の重点施策と今後の見通し

2016年度に実施した施策を継続して推進します。東予工場では45万トンのフル生産を維持するとともに更なる生産性の向上やコストダウンを進めることで競争力を強化します。播磨事業所では、さらに4万9千トン体制をめざした投資を行ない、電池材料への供給力を強化します。日向製錬所においては、フェロニッケルの最適生産体制を維持・整備します。

コーラルベイニッケルおよびタガニートHPALでは、2017年下期より合わせて6万トンの生産体制をめざします。また、インドネシアのポマラで進めているHPALプラントの事業化検討も推進します。

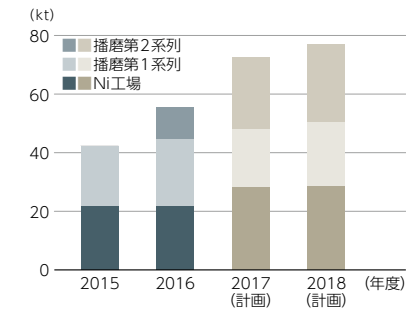
スカンジウムについては2018年度に商業生産の開始を計画しており、HPALの高付加価値化をめざして同様にクロマイトの事業化の検討も進めていきます。当社では、資源・製錬・材料の3事業を相乗させたビジネスを推進しており、今後は材料事業と連携して非鉄金属の供給・販売の強化などを図っていきます。

2017年度のセグメント業績は、銅精鉱の原料条件の悪化、電気銅などの在庫評価影響などにより、売上高5880億円(2016年度比4%増)、利益260億円(同22%減)を見込んでいます。

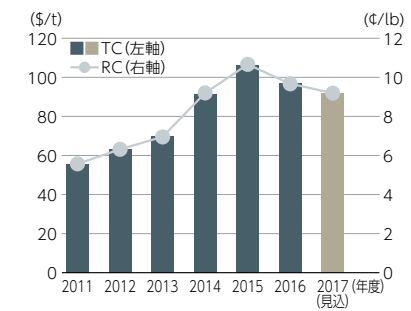


播磨事業所において、硫酸ニッケル生産設備増強等を実施しました。海外ではタガニートHPALニッケル社等で設備投資を実施しました。

〔硫酸ニッケル生産量〕



〔TC/RC推移(ベンチマーク)〕



取締役
常務執行役員
金属事業本部長

野崎 明

Topic

燃料電池用途としてスカンジウムの本格的量産に着手

当社は、西側諸国では初めてとなるスカンジウムの本格的な商業生産計画を進めています。このスカンジウムは、当社が世界に先駆けて商業化に成功したHPAL技術の副産物として生まれるもので、それらを回収して中間品を製造するプラントをタガニートHPALに建設。さらに中間品を最終製品である酸化スカンジウムに加工する工程を播磨事業所に設置します。

スカンジウムは希土類元素の一つであり、燃料電池などで

の応用が期待されています。これまで世界的に生産量が年産10～15トン(酸化スカンジウム換算)と少ないため需要が限定されていましたが、当社の本格的な商業生産によって長期的かつ安定的な供給が可能になります。当社は、すでに燃料電池向け用途として米国の大手企業と長期販売契約を締結しており、今後、燃料電池を基軸に新規用途を拡大し、顧客とともに市場を創り上げていきます。

また、スカンジウムをはじめ資源の効率的な回収を進めることでHPAL技術の付加価値を高め、ニッケル事業における競争優位性をさらに向上していきます。

〔スカンジウムの用途〕

